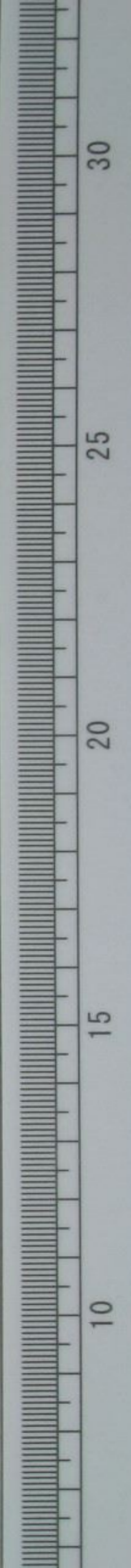




經驗醫療手引艸 一

イロハニホヘト

十武
435
/



醫學研究
卷一
435

醫學研究玄玄書

藥方全書

古方後世方經驗



妙藥醫酒療手引卅序

滕見隆先生著此書探
諸家秘奧傳卓澤奇方
於自家嘗試効而採摘
經驥病名以國字別之
雖倉卒之間隨手病則



令得方以濟郡生是實
老波女心切也予感先生
仁沢抒欣躍之情遂題
是廣其傳焉

鳥飼洞齋題



凡例

一 此集ハ諸家の秘方即効あり者を
多年傳受して書寫之。年々を來
見聞する而和漢此妙劑と雜記
する數十卷。書で書函は満り。蠹臭
乃蝕んことを恐れ。眼目繕之煩甚を
精華と撮之約て一帙とす。庸醫童蒙

凡例

乃後も了解し易くうんせり。文辞と不
莊重く俚語といふ候名も誌し。いろは
字を用て病門と分たす。同者其部下
に於て治法と求むべし

一いろはは分れ病名或ハ音。或ハ割。或ハ和語
といふ起する者ハ俗間の流言に從て
急率に搜覧し備ふ
一齒疾 ①ハの部 蛙牙 ②の部 骨れどき

各初よ粗出とありといへども。其委曲治法ハ
口中門 ①の初よ示之。他者准之て

一 考入 ①

一 楊梅瘡 天疱瘡の如き。世俗大豆瘡

及花瘡 濕毒などいへり。ともよ瘡毒

れ一類なれば ①の初よ出之。如ハ病証也

其至 名を舉記之。又骨痛ハ瘡毒

の條下よ載。搗骨ハ亦撲金瘡也

中より出たり。餘推類索于茲

一惡阻。胞衣不下。血証等。凡產前後乃

諸病。或ハ疝氣。風。乳癖の類。惣て小兒

乃疝疾の如き。其病名は因ていろいろはの

胎ノ不。産前後。さの胎小兒門。せの胎

よ纂述了

一眼目。めの胎産前後。さの胎小兒。せの胎

等の諸証。家傳の治法あり。各胎よ不。纂

と著すといへども。快大よして。周覽。煩

多。右ニ科の治療。亦ハ附録卷。出

たり共よ。泰考ふべし

一諸病。妙藥集。近年世よ流布者。若干卷

あり。け書。校合之。既板行よ出たり。某方

ハ悉。除之。故よ治法。或ハ闕。たりも。あり

他書よ。譲りて。復不贅

一諸方。藥種。功能。少。似。たり。を。以て。和

漢と雜る物あり。野人久た本の薬と搗つき
 紋あざ方かた汁じゆ瘰れいと截きり薬とすれば。これを為か
 けて常山じやうざん 本州ニ出いり。○於毛止おもとの
 根ね蝨し腰痛やうりゆうの字と治ちす。○藜蘆れいりよと為か
 け 藜蘆れいりよ 本州ニ出いり。○為か味あじ苦く小兒せうじの法はふ 藜蘆れいりよ
 腰痛やうりゆうの薬なれば。○胡黃連こわうれん 本州ニ出いり。○痲瘋まふう
 と一類いっるいとす。桂けいもども實じつハ別種べつしゆなる
 一いのめなり 博達士論はくたつしろん 又功能こうのうも別べつなれども。
ありて醫す于此

和俗誤稱わじやくごせうする物あり。○和肉桂わにくけい 松浦まつらと桂けい心しん
 漢肉桂かんにくけい 蘇皮そひと割けと名なけ。○樟腦せうのう 燒やき瓦ゑんと斤腦しんのう
 去いて肉にくの膏こう皮ひ桂けい心しん也なり。○大風たいふう子こと雷らい丸わんと稱せうす
 梅うめ花はな竟けい腦のうなり。○雷らい丸わん子こ別べつ也なり。和言わごんニ癩瘡らいさう小瘡せうさうなどの薬やくニ雷らい丸わん油あぶらといハ
 皆みな大風たいふう子こなり。返かへ竟けい丹たんをいの劑ざいハ真まの雷らい丸わんと月つき也なり。○
 如ごとく誤ご甚し多たし。大おほま治ち法はふニ害がいあり。今和薬いまわやく
 ハ和名わなの事ことを記しし漢名かんと附會ふくわいする物もの別種べつしゆ
 と誤用ごようする類るい。意い改か之しハ集中初学しゆちゆうしゆがく士し。師傳しでん等らを日授にっじゆ
 之これ故ゆゑニ兼ある俗じやくのことを記しす。於おハ訂考ていこうニ漏もるものことん
 至いたる蓋たがひあり今改いまか之し 於おハ訂考ていこうニ漏もるものことん

しと。後人以て正之。又龍氣と本龍本州 蛭蛇の別名と

本龍と名け。末久利利の若末久と名け。利と別相なりと名け。

久知草本州 三尾草を仙人州久知草 三尾草と云類。傷人古昔

より用来る其危とされば。此書不改之傍よ

他名を附て知し。漢の方書と関する時敢

て混雜こんざつすることなり。れ

一卷中の方劑。諸家自得活機くわきの妙術はし

て其理曉し。不能者有之。必臆見おそけんを不す加

授受じゆじゆのまうよ。撰集せんしゆす。愚對証ぐたいしやう 試用て

梓菽しゆしゆの應驗おうげんを得こと。數多度也。私ひそに知良

醫い立方たつぽう之類。廉略れんりやくの事ことよあ。次つぎ。傳たづ言げんハ磨

研けんの薬やく抹羅合まらごうと經へて精くわいグごと。蓋けし活

療りやうの法ぽう。古人こじん教おしよ。七方しちぽう十劑じゆしの品しんあり。是

秘ひ用やくれ。虚實きよじつ標本へうほんと詳審しやうしんよ。監察かんさつて補

字あざ緩急くわんきやくの治ちと施せさんさんおなり。當時たうじ尚なほ奇

馳ち異いて。謾まんよ。速効すくきうと求もとんと欲やつ。病証びやうしやうと

不辨^{すまき}卒^そ尔^ろよ茶劑^{やくざい}を投^なぐ。大^{おほ}過^{くわ}失^{しつ}と
 得^えて却^{かへ}る罪^{つみ}と方書^{はうしょ}よ帰^きするこゝを
 れ視^み者^{もの}其^{その}思^{おも}諸^{しよ}

いろはにほへと一目錄

いの部

- 疣^いを治^いする妙^{めう}茶^{ちや} 此^{こゝ}丁^{てい}ノヲモ
- 疣^い黒^{くろ}痣^しぬき茶^{ちや} 同
- 瘰^い子^し石^{せき}瘤^{じゆ}惡^{あく}瘡^{そう}等^{とう}の根^ねをぬく茶^{ちや} 同^ウ
- 疣^いの茶^{ちや} 同
- いぬごの妙^{めう}茶^{ちや} 同
- 一切^{いっけつ}乃^の痛^{いた}を止^とる茶^{ちや} 此^{こゝ}丁^{てい}ノヲ

○ 同

同

○ 痛を治すの薬

秘方万治散

同

○ 疥癬の薬

万腫物癩よけの妙なり

同ウ

○ 婦人陰中腫痛を治す

世ニテヲ

○ 同臭氣を止る

同

○ 同方

同ウ

○ 陰風乃薬

同

○ 陰中臭氣を除く

同

○ 陰中破れ疥癬かききと治す世ニテヲ

○ 陰中乃痒を治す 同

○ 陰囊赤う治り又俄に大なるを治す同

○ いが痔れ薬 同

○ 犬の咬つるを治す 同

○ 又方 世ニテヲ

○ 又方 同

○ 又方 同

○ 遺精を止むる方 同

はの効

○ 嬰癩の葉 小兒をへづ 同ウ

○ 嬰癩膏葉 凡五丁メヲ

○ 嬰癩此葉 同

○ 同押葉 赤撲ももよ 同

○ 嬰癩と治す 同ウ

○ 軟癩の葉 同

○ 秃此葉 凡六丁メヲ

○ 同方 同

○ 皴れ立返一葉 同

○ ばし里痔此葉 同

○ 同方 同

○ 腫をひきよる葉 凡七丁メヲ

○ 鼻血を止る奇妙方 同

○ 衄血并諸失血を止む 同

衄血えんけつと心こころ切きり疝まぶらと治す

同ウ

鼻えんかのやまひ疝

同

又方

廿八丁メヲ

鼻塞えんかふさがりつう通いぜす息いき法はまるを治す同

鼻えんかふさがり艶の茶

同ウ

赤あか鼻えんか乃茶

ざくろ鼻もりもり同

小兒赤鼻えんか茶

廿九丁メヲ

小兒鼻下おとしがひよりあか顔あかよりあか赤あかくあかぬあかぎあかけ

うろと治す

同

鼻えんか中ちゆうより出でるえんか花はなと治す同

酒さけ瘡あざ鼻えんかの付茶

同ウ

齒えん茶

七味散

同

齒えんの痛いたと止とる茶

同

齒茶

廿丁メヲ

齒えんくさえん乃妙茶

同

齒えん乃瘡あざと治す

同

○ 齒の疼を止む

同ウ

又方

○ 齒と固目をめやす

固齒明目散

卅三丁メヲ

○ 齒の生る薬

同ウ

○ 齒くさの薬

卅三丁メヲ

○ 走る牙疳の薬

同

○ 齒動脱とすりを固る方

同ウ

○ 齒と脱方

同

○ 齒齧痛を止む

同

○ 齒と赤て初を止

卅三丁メヲ

○ 肌乃魚をよくする薬

同

○ 腹切腸出うろを治す

同ウ

○ 膝瘡の薬

同

○ 腹の浮るを止る方

赤白痢病よほし
三十四丁メヲ

○ 肺癰治方

同

○ 池淳止薬

井流

卅五丁メ

○ 泄瀉止薬

同

○ 千種皮黒薬

腹の痛ニよリ
ひひのほ久痛ニよリ 同

○ はありくさの薬

丹毒ニ用

○ 白蛇散

名方

同ウ

○ 孕婦茶毒中り

子と握固絶す
同ウ

○ 蜂ノ螫れ方

と治す 同

○ 蜂ノ螫れ瘡甚止がこきを治す 同

八の部

○ 日腫の妙薬

卅八丁メヲ

○ 面皰の薬

同

ほの部

○ 骨たぐひ方

同ウ

○ 接骨

同ウ

○ 同方

同

○ 骨より肉と上る方

卅九丁メヲ

○ 瘧疾ぬき薬

同

○ 骨ぬき 喉より真骨を抜く方なり。のれぬきも別方あり 同ウ

○ 同妙薬 同

○ 同 竹木のどげ喉より立るるもよ 同

○ 疱瘡とせざる浴湯の方 四十二丁メヲ

○ 疱瘡解毒 けいどく 疱瘡とのどろく薬なり。ひ方と別れハ別出てモかる 同

○ 疱瘡妙薬 名方 同ウ

○ 皇き疱瘡に用る方 秘方 四十二丁メヲ

○ 疱瘡の妙薬 同ウ

○ 同 四十二丁メヲ

○ 同名方 同ウ

○ 疱瘡の薬 同

○ 同 秘傳 四十三丁メヲ

○ 疱瘡禁穴へ出さぬ方 同

○ 同 やとどろ 時用る薬 同

○ 同 まやのあひだ 茶熱の時眉間へ付薬 同

○ 瘰癧を治する方 同

○ 疱瘡目よ入ぬ法 四十四丁メヲ

○ 又法 同ウ

○ 疱瘡の後目痛を治す 同

○ 又方 同

○ 疱瘡目の薬 四十五丁メヲ

○ 疱瘡出兼るゝ薬 同

○ 疱瘡れた海りを治す 同

○ 疱瘡くさけ油ト里を兼を治す 同ウ

○ 疱瘡目へ入るを治す 同

○ 疱瘡の海りと瘡 名譽の法なり 同

○ 疱瘡のつらぬ法 秘傳 四十六丁メヲ

○ 疱瘡の痕を失ふ薬 同

△の部

○ 蛇よ螫れらるを治す まじりも月 同ウ

○ 同法 同

○ 又方 同

○ 同 二方 蟻 蛇 大 子 交 れ る よう

同 四十七丁メヲ

○ 同 同 其 外 毒 虫 螫 る を 治 る 咒

○ 同 療 疽 の 薬

○ 同 方

○ 同

○ 同 妙 方

○ 同

○ 同

○ 同

○ 同

○ 同

○ 同

○ 同 四十九丁メヲ

△ の 初

○ 雀 目 此 薬 小 児 疳 眼 に 用 て る 同

○ 飛火瘡藥

同

○ 灸刺拔藥

同ウ

○ 同

同

○ 同 笠屋方

同

○ 同

五十丁メヲ

○ 同

同

○ 毒矢又中？る時治法

同

○ 吐逆と止る法

同

○ 吐血と治する法

同ウ

○ 同 神授方

同

○ 肉損吐血下血と止る方 五十丁メヲ

○ 吐血と治す

同

○ 毒消

同ウ

○ 毒消 長屋

同

○ 同

五十丁メヲ

○ 解毒 法毒よふれ及び諸毒虫
又蟻れらると治す

同

○ 同 秘方

五十二丁メウ

○ 諸毒丸 毒中りくろを治す 五十三丁メウ

○ 毒虫丸 毒虫を治す 同

○ 國光飲 毒薬中り 同

○ 解毒百福系 諸毒をけし。諸毒中り 同日敷経るよはし 同

○ 一切毒虫を殺する系 五十四丁メウ

○ 毒中りくろを治す 同



○ いのち

○ 疔を治する妙薬

藤井呂米子見隆 纂輯
長岡恭齋丹堂 校正

○ 桐葉と揉て其汁と付へし 奇妙に愈

○ 疔黒痣ぬき系

○ 藜と石焼ししと石灰と等分何はても蓋

此ある器よ酒とすり入。此れ藜石灰と揉

へしよ糯米と並べ極。又其上よ右れ二色と

空。息乃少しも出ぬやうに能蓋をしめ。以糯米

此解^{こけ}うろをぬて疣^{いか}黒痣^{くろし}ふ介^かへ付^つぬやうに付^つべ

○瘰^い子^が石^こ瘤^が癰^あ瘡^く等の根^ねをぬく薬

一巴^く豆^づが生^{せい}きて 磁^{せい}茶^ち碗^{わん}の粉^{こな}大

右^{みぎ}二^に味^み糊^くと丸^{まる}一^{いつ}を疣^い石^こ瘰^れ等^{とう}ハ滅^めして

傷^やく付^つべし。小^い瘰^れの類^{るい}ハ捨^すりかけして

○疣^いの薬

一蜻^た此^こゆで汁^{じゅう}麝^{じや}香^{かう}ぐり其^{その}長^{なが}俵^{ひょう}付^つべし

○いぬごの妙^{めう}薬

一^{なま}生^{せい}麩^ふ子^こ濁^なす^なと包^つ吞^のべし^じぬ^ぬも愈^い

○一切^{いっ}乃^の痛^{いた}と止^とる薬

一^が地^ち骨^{こつ}皮^ひ粉^{こな}万^{ばん}の痛^{いた}と止^と愈^いすあり

○同

一^{じん}川^{せん}烏^う以^い 草^{そう}烏^う以^い 茶^{ちや}木^{もく} 薑^{きやう}皮^ひ

白^{はく}芍^{しやく}药^{やく} 川^{せん}芎^{きやう} 枳^き殼^{こく}各^{かく} 八^{はつ}靈^{れい}脂^し 等^{とう}

右^{みぎ}粉^{こな}一^{いつ}糊^くと酒^{しゆ}と解^と丸^{まる}め三^{さん}十^{じゆ}粒^{りやく}

用^{もち}ひ。汁^{じゅう}出^でるを驗^{けん}とすべし

○痛^{いた}と治^ちする薬 百^{ひゃく}治^ち散^{さん} 妙^{めう}薬^{やく}極^{ごく}方^{ほう}

一^{なま}百^{ひゃく}草^{そう}粉^{こな}を白^{はく}麩^ふ 六^む五^ご 酒^{しゆ}を以^{もち}て

解付べし。蓋よはさじ中は腹痛法の痛
と治す胸虫よは上よ付て妙なり

○瘡膏茶 万腫也疔疔付て妙なり

一辰砂あんに 朱あま 煇耳石あかみみいし 寒水石かんすいし

滑石くわし 河仙茶かせんち 白緑はくろく 括樓根くわつろうこん

綠毒ろくどく 肉豆蔻にくづかう 枳椇けいこ 各粉かくこな

一仙人草せんじんそう 車前子せんぜんし 日冬ひふとう 石菖せきしょう

本丸本ほんまるほん 蓬よもぎ 長なが

右六味よ多四体入煮つめく二味と一それと

漉て其汁をうりと濁へ煮てみ合とを

又布よて漉赤の粉茶と松脂しょうじ 百目ひゃくもく 唐蟾たうぜん

と入煉阿炭あたん 火と和やわ りよそろくと煉ねる べし。

火つよけ色の焦こげ つくなり。以膏茶かうち 疔腫あぶら 物

くさり何きも瘡いへ すとりひひなり

○女陰中腫痛おんなちゆうしゅう と治す

一の禁こころ 燒や 大黃だいかう 甘草かんさう 其草きそう

細末こま 一いっ 葉は 乃大丸なほだいまる 一布いっふ 包陰中ほういんちゆう へ入いれ 包ほう

○女人陰中おんなちゆう 臭氣くわいき と止とど め

一沉香と最さいのすにすて解と陰おん中ちゆうへ入いべし
内うち茶ちやよも沉香ちんけんと少せうく用もちてす

○同方

一友ゆう瘤こぶ竹たけの虫むし糞くそ 丁てい子し 各各自各各自分ぶん

右みぎ合あし雷らい屯とんの油あぶらよて付つべし

○陰いん氣き乃の茶ちや

一多た葉は粉こなと水みづよ浸ひし。其その汁じゅうを付つて一いち夜や
置おべし。虫むし赤あかくなり居ゐ死しして治ちやうるなり

○陰いん中ちゆう臭きう氣きと除のぞく

一八月はつがし又また樓ろう突とつの赤あかきを丸まるく置お入いべし治ちやうす

○陰いん中ちゆう破やぶれ瘡かさがさきを治ちやうす

一石いし灰はいを煎せんじな友ゆうと洗せんふべし。又また雄ゆう黄わうを
粉こなして捨すりかけべし

○陰いん中ちゆう乃の痒かゆを治ちやうす

一蛇おと床とおの的てき焚たは二に味あじ煮にじし洗せんふべし

附つ子しとの的てき焚たと粉こなよし捨すりかけるも佳よし

一楮こ子し粉こなよし楮こ子し 二に味あじ煮にじし

金きん箔ぱくを加くへくは茶ちやよ一いち七しち日にちづ服くする也

年こわづ減すべし。茶お應すれハ陰
囊濕のるなり

○陰囊いんのかう赤あかりつめろ潰つぶれは大おほく成なるを治ちす

一い桃ももとすりて蘇葉そへつ此こ汁じよて付つべし

○いが痔ぢ此こ茶ち

一い蠶さ痔ぢとあがり酒さけをいが痔ぢよ二三度

付つて。其その後のち指さしよてい茶ちと付つべし。腫物しゅぶつよハ配はい

よて付つへしい茶ちハ腫物しゅぶつを托たく又また愈いも妙たふ也

○大おほの咬くはらるを治ちす

一い時とき禁いんとありよて解と付つべし

○又また方かた

一い蟹かにの腸はら乃すなはち黄きなる物ものととりて付つべし

○又また方かた

一い杏仁あんぎんとすりて付つべし

○又また方かた

一い石膏せうこう此こ粉こなを付つべし

○遺精いせいを止とむる方かた

一い黄柏おうはく四し兩りやう一い両りやうの黄き便べんよ浸ひし炒ちやう一い兩りやうハ

塩多し浸し炒。一盃人乳を浸して炒。一
盃の生よて用たよ細末し煉蜜よて其實
乃大さよをど空ふよ二十粒かど酒よて飲べし
其効速なり。○又硫黄一塊梘孔を塞へ
し即止るりのなり

【はの効】 齒に於中この効を考へ合すべし走痔ちの効
あり。癩癩りの効を考へ合すべし

○栗瘕の茶 小児のなつどし
一炭粉を多く煉て膏茶のつくは栗瘕
れよ付盡べし。愈て後己し茶これるなり

○栗瘕膏茶

一莖 烏貝 鱉 鱉 各 煮よして
右松脂よて煎減し煉て付べし。愈るまでをらす

○栗瘕の茶

一田 羸 松緑
松脂 田か入の
右松粉よしうす糊よて作りませか
火よてあつめ付べし妙なり

○栗瘕押茶 亦撲よもろし

一 薯蕷 やまのいも 薯蕷をすりおろす 檳榔子粉 ばんらうじの 粉 右を腫らる海りりよ付へし。焼傷も竹虫糞を少一加へくよし。

○ 痲痺と治す

一 荒布 あらいぬ 蒜 あし 葱 ねぎ 中 ちゆう 煤 すす 中

うりかくべし

○ 軟癰の茶

一 大なる根殼を半ちよ刻肉をぬて皮を平め糯米の飯を搗爛し根殼の内よぬりて

軟癰の口よ何て塗べし。其膿出るよ任せて根殼をぬべし。次自愈。○ 又鷄子殼煨て末しとすねの海りりよ塗へし。即ち飲つて瘡

○ 禿れ茶

一 着 まき 糸 いと 荏油 じんあぶら 小便 せべん 此をり

楊柳皮 やうりうひ 鴈 かり 此とまり油

右すり合て洗ひ二三度付べし

○ 同方

一 鮓 かか 河豚子 かぶつこのこ 蒼朮根 そうじくのね 香 かう 霜 しも

右胡麻の油よて煉合付べし。白朮あり
バクハシハ毛と抜く付べし

○臧此立返し一葉

一 串棟と荻ト用

○ちりし痔此葉

一 又倍子の粉と蔴葉一うくかど用。何よて
も病人此好次用也べし

○同方

一 黃連 荊烏頭 荊芥 槐花 石菖根

右各を分耳州かへて乾乃こく乾ト用

○腫とひきよる葉

一 丹紅草 葵此葉 芍薬 二味

陰乾よして粉よし。合せ付べし

○鼻血と止る奇妙方

一 椶櫚乃毛を短く切鼻の穴へ入べし。立処よ止る

○衄血并諸失血と止む

一 卒丸竅四肢の指の岐より血濺が如く
ある者何り是暴よ驚より致取なり

これと治すり法。其病人は知しむるまなく
井花水あきのいどろと面おもては嚙かべし血即止ちまる衄血あぢよを
却かへありニサウトカケベシ井花水ニカギルヘカラズ

○衄血と止切きり疝まちと治す

一軟やまを花はな陰かげ干がして粉す舌の上うへよ

かーやま密ひそべし止とるまめなり

○鼻はな疝まち

一鼻はなハ清せい氣きお入いの道みちより肺はい和わ調ていする
時ときハ香かうをかき上あ焦あせ熱ねつする時ときハ鼻はなの先あ赤あかく

鼻はなの内うちは瘡かさ生せいじえんよくきと酒さけ釐さと外
よハ牛うしの耳みみれあうと付つ内うち葉はよハ山さん梔し子こ
黃わう芩しん陳ちん皮ひれ煮せんじけと刺田でん

○又また方かた

一黃わう蘗びやく 若わく參しん 栝くわ子し 各かく細さい末まし

解かい合がせ付つべし

○鼻はな塞さい通つうせす鼻はなつまるを治す

一岡おか通つう丸わん

草くさ澄じやう茹じゆ 薄はく荷か 荊けい芥かい

右末一蜜よて丸一口中よ含よく和り
して汁と飲べ一

○鼻をか艷とけの茶をかきり鼻塞物の香不入或鼻中よりをかきり

一甜瓜づい蒂の粉よ一麝香あや少加へ蜜よて○こ

の大よ丸一綿わたよ包鼻をかの孔あなへへ一清しみ深むか
多出と分愈るり祚ののごら

○赤鼻あか乃茶をかざくろ鼻ともり

一硫黄い細辛さいしん乳香にゅうかう檀粉たんぷん各各等等分

右あよて解と合せ付べ一

○小兒赤鼻あか此茶

一黃丹わうたん雄黃ゆうわう二味に等等分 粉こなよ一

あよて解と合せ付べ一

○小兒鼻あか下かより顔かほよい赤あかくあぬあぎけ

つらと治す

一的礬てきわん戎えい分 阿仙茶あせんちやみ分 粉こなよ一

あよて解と切きくく付べ一

○鼻をか此中よ出でつらと治す

一蘿藦らふを味粉あじこな猪いのの油あぶらよて付けへ一

○酒渣鼻の付薬

一 鷓鴣屎を合 臘月の猪脂よて和り

毎夜鼻よ塗べし 或ハ酢よて解けり

○齒薬

一 藜あろご 七味散しちみ 沉香ちんこう 白礬びやくらん

昆布こんぷ 木凡もくぼん 沉香ちんこう 白礬びやくらん

右細末し 楊枝よて付べし

○齒の痛と止る薬

一 茄子蒂なすびのへた 焼塩やきしほ 焼塩やきしほ 加へ付べし

○齒薬

一 肥玄こへい 滑石くわつせき 燒て 竜腦りゆうのう

右粉よし ちよよて 練付べし

○齒くさの妙薬

一 苣荳ちよこのとう 耳聾みみさう 燕つむりのふん 燕つむりのふん

くさよ 鍼はりと刺 其のへば薬と一日よ三夜つ付べし

○齒の疼と治す

一 刺前葉せんぜんの汁よ 蘇す 蘇す 蘇す

疼方うづれ 耳へへし

○齒の疼を止む

一白楊皮を細末し酢と熱て一夜白

楊皮の粉を白かどづ海せ合口中含

暫して漱魚

○又方

一鯽魚一ツ腸と玄腹の内へ塩を一をい

よ入炭火にて焼煙透し紅なり煙

の盡るを候て此の上を磁器類を蓋

よして冷る時細く研て貯へて歯痛

處よこれと擦つけく即座よ治す

○齒と固目をめやす固齒明目散

一槐 枝葉とも 川柳 枝葉とも

右二味丸を枝の細く削糸刻一鉢づ桶よ入

あを浸こよして一日二夜浸し煮濃汁出

るり時濾て渣と去。其中へ葛根を煮れ

白堊を塵と攪り捨濁よ入煎じ煙の立

まで炒茶研よて細くねらるるなり。煎やう

ハ乾夕楊枝よ付齒よぬり口よ嚙たまりる

と齒のろへ紙地をむやうよすべし。少あきん
附官の口よたまりくる唾よあを會派其汁
よて目を洗入べし。不改久く用されハ効
うす。右二も糸なれ時搦るよハ枚平よても
くるしかり次

○齒の生る薬

一 眼膏 地黄 石硫 石炭 石粉
沈香 耳草 山菜 各五分
右粉よし絹よ包うりあし。齒齦と洗入べ

一 又 齒のどく 耳んし 用由

○齒くさの薬

一 昆布 藜 白礬
茄子蒂 各五分 乳香 耳草 各五分
右粉よして付へし

○走る牙疳の薬

一 蚕退紙 蚕のふれ付うり 黒焼よし 鹿射香
ばうり入蜜よて調付へし。白礬とあし加へ
うりむ妙なり。又蚕蛻皮と研末傳も佳也

○齒動脱とすりと固る方

一 芦薈を粉まして玄。先塩よく動齒の根と摺水よて洗淨。右の粉茶と傳へ

○齒と脱方

一 小と付ずして齒と取よハ 草烏頭 藜

撥 各ハ 山椒 細辛 各十 右細末一少許

脱と思ハ齒の内外ハ指付へ。其齒自落

○齒齟痛と止じ

一 杏仁 塩少入水よて煮くよ味

出ると去く杏仁を口中よ含べ一いまご止

ざれハ吐出。又右のどくこ一らへると

含じ之及ガどよて瘡なり

○齒と赤て動くと止

一 茯苓根と焼灰よして動齒ハ貼ハ即卒

○肌此患をよくする茶

一 绿豆 白附子 滑石 白芷

耳松 龍腦 白檀 各をぬ

右七味末して身よ傳浴 とき洗へ

肌養玉乃ご

○腹切腸 出ろと治す

一 黒猫爪 唐躑 椰子油

右之味煉合つけべし

○同腸切ろと治す

一 雞乃血と付べし 瘡

○藤瘡の菜

一 麻角 黃栢 山梔子 各等分
右之味煮して搽かけべし

○腹の浮と止る名方 赤白痢病よし

一 罌粟 肉桂 錦大豆

人参 干姜 甘草

右 抹して罌粟 取茶 葱湯よして用由

べし。腹痛瘡之氣味あしきよハ 芍薬

又 黃連を加へてよし。あがり腹よて圓よ居

よくきよハ 蓮葉と粉よして加へべし 産前

小ハ 干姜と除て香白芷と加へてよし

一い証ハ胸中隱痛咳嗽ありて膿血と吐
 始ハ唾腥臭後ハ膿とある也氣喘て外
 してあつたはるるハ葶藶子云々黄芩よ物
 粉よして●い大さよ丸一毫二十を水三盃
 入三盃よ煎ぐい茶一粒づへ再び煎一盃
 よして服すべし○腸癰の灸法ぬの肘を
 屈て肘ハ銳骨よ左右各百壯かと灸す
 べし膿血と下すこと多して瘡なり

○世浮止茶

お井流

一肉豆蔻 半分 干姜 半分 厚朴 半分
 一瞿麥 五分 甘草 一分
 右細末一飯の湯よて用也べし

○世浮止茶

一瞿麥 五分 干姜 五分 木香 五分
 一甘草 一分 肉豆蔻 五分 黄連 五分
 厚朴 五分 黄芩 五分 白朮 十二粒
 右各粉よ一飯湯よて用

○千種皮黒茶

脇の痛よよし瘡よし
 梅ニ右ニ方脾瀉日久
 者ニ用ユベシ

一 蒼葱根 玉焼より一味白湯にて用

○ はありくされ菜 丹毒に用

一 灯心 黒焼 連銭草 玉焼 赤小豆 粉はし

右何れも等分より一研よて付べし

○ 白蛇散

一 蟻 頭と去皮をえぎぬりあきやど洗ひ。脇と去。一煎酒に浸し。陰干しよして碎き黄多しあがりきまら粉よし

麝角 白焼 麝香 equal parts

右三味細末 一夜に密子よ二ツ三ツやどつて用也

右効能 并ニ吞汁之傳

一 雞産 小ハ 薏苡仁 桔梗 杏仁 芍薬

右乃散薬を服す

一 産後乃眩暈。又ハ産後此上氣等ハ味嚼

汁よて用也

一 胞衣 小ハ 益母 加ハ葱一用也

一 赤腹 志乃腹 小ハ 罌粟殼 葱一用也

一 水泄 小ハ 白痢 小ハ 芍薬一用也

食のり湯よて用也

一血ちれるよハ酒さけよテ用づ下げ戸こよハ湯ゆよ酒さけをかへと用づ

一小瘥さうよハ寒えん中ちゆう毎ま日あ七しち日にち用づれバ其その年とし不ふ瘥さう

一金瘥きんさうよハ酒さけ味あじ噌そう汁じゅうよテ用づ

一氣付きつけよハ多おほよテ用づ

一血止ちどめよハ捻ひねりかけべー

一瘧よハ多おほよテ用づ

一戰慄せんりつよハ温ぬる湯ゆよテ用づ

一虫食むしくひ齒はよハすりて用づ或あるハ穴へ入べー

一長血ながちゆう白しろ血ちゆうよハ香かう附ふ子し 或あるハ煎ー用

一喘息ぜんそくよハ荊けい芥がい 亦また煎せんト用

一万吐と逆ぎやくよハ湯ゆよテ用づ

一膈よハ味あじ噌そう汁じゅうよテ用づ

一中風ちゆうふう脚か氣けよハ地ち湯ゆよテ用づ

一頭痛づつう考こうよ奈るよハ乾姜けんきやう煎せん湯たうよテ用づ

一淋病りんびやうよハ湯ゆよテ用づ

一河豚かぶとんよ碎るよハ酒さけよテ用づ

一石白いそく蛇だ散さん 用づるよ用づる法

一血了けつりやうよハ舌しよを洗ひ舌の上のよぬり水門のあらよぬ

ても癩草乃汁なりとも竹筒入飼べし
一かいらよ酒を温飼べし

一息合よハ舌よぬるべし

○孕婦毒中りよと振岡絶すと治す

一白扁豆生皮と飯のそ湯にて用て炒なり

○蜂よ螫れつらと治す

一女竹此葉と手一末よ切。三末よあ。三律
入て式律よ蒸し。用也べし

蜂よ螫れ疼甚止め。さきを治す

一蜂房と細粉（猪脂にて解す）。玄処よ治す

にの効

○日腫の妙薬

一楊の本此皮（黒焼よ）。白湯よて用

又ハ刻（て用もよ）。又方男ハ老女ハ右此（碎れ）

肉打目の美中（より血をとるべし）

○面胞の薬

一密陀傷を粉はし婦人の乳汁よて解。寝

さまくよ顔よぬり。的射洗ハ治すべし

かやうよ二三度あつた四六度よて悉愈る

ほの部

○骨たぐひうろと治す

一楊梅皮細末一土竜の黒焼と等分よて梅漿よて解切て付べ

○接骨

一骨つきよハ右の茶と梅干の肉よてねん付其上と柳の皮よて巻なり

○同方

一楊梅皮 其ま

輕粉 かー 川鱉 煎

○ 沈生

○ 瓢 赤地利 煎

右粉よ一緝屋の糊よて押合骨れね

うろろよ付べ。其上を楊柳よて巻いべ。以法愈すとりゆるぬ

○骨より肉をとる茶

一草茶と粉よ一乳よて付べ

○瘧 廩ぬき茶

一瘧よても廩よても其上を竈の土よてまく

すり乾し。丹礬と粉よ。水よて付べ。

○骨ぬき 喉よ臭る此骨立とらと接方なり
の粒よも非方あり

一家礬と巢こもよ飯糊よ押合せ眉の

ろよ紙よて強べし妙なり

○同妙薬

一礬礬と白湯よて用ひ妙なり

○日 竹本のこけ喉よまらるよも

一椶朮 クゲケ 牙朮粉

右二味 ホ分。是後よ丸しとき一粒と末し

て用甲らなり

○痘瘡とせぬ浴湯の方

一梨木 七中身一葉よ切 枳木 七中身一葉よ切

赤小豆 七粒 鼠糞 七粒

右四色白ろと蝨乃蓋よてはくり七盃入

煮どけ水よさすりなり

○痘瘡解毒 痘瘡とのへるく薬なりは
を用ひれが毒おてもかるし

一亀門湯 或家此秘密の方也
お徳しためす

男子よ用る方

唐大黃ハハシ 黄芩セリ 甘草セリ

右三味細末し。用ゆる時ハ絹きぬ子包つこし。

出いしハ夜も七夜も用由

女子むすめ子用る方

唐大黃キヨ 黄芩ニ 甘草ニ

右月事

○癩瘡妙薬 右方

一土竜くろくろ 骨ととろ 金箔ニ 二枚

右二色糊よて・气き血けつ子こ丸わし金箔と以もて

衣いろし一粒ひとつぶづ月つき白しろべし

○重おもき癩瘡かも用る方 秘方

一い大おほ力ちから子こ丸わ 土器つち子こ入い炭すす火びきをてへろく炭十じゅう粒りゅう細こ 九く川がわ粉こなをく焼やくる時を紙製し梨なし子この目 自みづか控かけを以もて清す

麦むぎ門かどをとり 赤あか石いし 右同みぎどうあり

土竜うはろ 竜りゅう 四足よんあしをとり大腸だいちょうをとり其その汁じゅうへ紅 花はなといをい入いてやく

南天なんてんの糸 赤あか石いし 黒くろ焼やく

右細末しこて挽ひ茶ちや一いっ少せう粒りゅう用由。香の汁じゅうハ天目てんめ 子こ丸わをい入いる時分ぶんは煎ず但し右の目へ

金子を五入こ煎ずべし用由の時焼塩少し
加へ用由。川芎此粉衣の黒茶よ三ゲ一入也

右川芎の粉ニ下焼一ヶ少一入ニ交り用
但し粉き煎瘡よハ不て用

○煎瘡の妙薬

一金箔 上々 寒紅 取此あり

右等分但しありハ少し也。右三を多りて
ねんく煉合。是證も丸し。金箔をい
衣とす。以丸茶煎瘡の初やこ二粒。吞
汁よハ其用る人の肺結をありてありし

用由。但煎瘡なれば極分かりし。たゞ煎瘡
よてなればも旨。後よ其難とれぐる。右れ茶用
ゆるるよハ外の茶と用平なれ。右の方則をす
しうする茶なり。又煎瘡煎瘡よて黒陷記
脹かぬらよも。以丸茶と用ゆきど能起瘡。是
と能し煎と出し。煎瘡かろくはげなし。
奇妙の秘方なり

○煎瘡の妙薬

一 黃牛の膏 一 菘本 一 芥子 一 加へ

右丸一 金をくるといふ衣と決

○ 疱瘡の処方

一 寒の中麻れ脊骨乃古血

一同 右二味等分一日三夜やど

づ用の四季ともよま生用てはし

○ 疱瘡の薬

一人参 三が 紫苓根 六分 車草 一

艾葉 〇 乾松茸 五分 合 五分

右水と食碗よ一盃半入七分よ養用る也

○ 疱瘡の薬

秘傳

一生雀と皮筒と凡とと切て金箔み板土器よて

貝と蒸て黒焼よす。あよてやうく用べー

○ 疱瘡禁穴へ出さぬ薬

一 熊膽 〇 橙 〇 〇

右末してあよてときて目鼻の廻り其

外禁穴こよぬるべし。巻をぬりころ而へハ

○ 疱瘡發熱時用る薬

一 兎の糞 〇 〇

十二月よ

き味

發熱ヤとどろと其まゝ月也ベ。肝風かんふうと拂はら入い友ゆうのやまらたの

○同發熱の時眉間へ付薬まゆのあひて

一 紫石英せきあひ 其まます

朱しゆ 其まます 玉器ぎよきよ入い炒ちやう

大黃だいかう 其まます

紫草根むらさきくさこん 其まます

右四味みぎよしみ 練ねと粉こなよよして貝かいよ入い水みづよよて解と眉間まゆのあひよ付い色いろハ痘疹いぼえんともよよかるる一い大秘方だいひほう也

○痘疹を治する方

一 痘瘡かうそうの中なか黒くろく大おほかるる色いろの或あるハ臭くそ者ものある

ハ是痘疹也急いそよ治ちせされバ死しす真珠まんと

ハ粒つぶ細こまよ研す別べつよ菟豆うづ 四十九粒しゆじゅうく 乱髪らんぱつ 其まます

右二味みぎふたみ 黒燒くろやきよよして細末こま。真珠まんとと一いっつよ合あ。

胭脂あざじ汁じゆよよてゆり膏かうととかか一いっ痘疹いぼえんよ付いべ

一。即時とくじよ色紅あざくありて効きうあり 按あニ真珠まんとヲ研す 法ほ監けん腐ふヲ二ふたツ

二切ふたきり内うちニ真珠まんとヲ入いルホドクボミヲツケ。真珠まんとヲ入いテ豆腐とうふヲ合あセ。灰はいニウツう三さん上うへニ炭火たんかヲ置おベシ。豆腐とうふ煨なシ乾かタル時とき。真珠まんとヲ取と出だシテ乳ちゆう碎さいニ入いル研すベシ。如此かくニスレハ碎さいケケヤスキモノナリ

○抱瘡目よ入ぬ法

一 牛蒡ごぼう丸まる實じつの葉はを貼はかど 天目てんめよ水みづ一盃いっばい

水入申分よ葛ト汁と目よぬるなり。洗入所
湯蒸よ一とよ一

○又法

一發熱の時寒乃紅と目の油より。脈而
付べ一其処へハ出ぬなり

○疱瘡の後目痛と治す

一木瓜の酢と目へ入癒一

○又方

一蝙蝠の血と目中へ入癒一

○疱瘡目の薬

一烏貝とよく土氣と洗ひ炙り其汁と
さす。又烏貝の肉とすり山椒味吻と付て
焼味吻とすり肉と食すべ一

○疱瘡出兼るよハ

一松茸と陰干よ一と一すよ切三本。あを天目
よ一とよい入申分よせんご服すべ一

○疱瘡れたまうりと治す

一松茸を乾て粉よ一。切こあよて出付べ

○ 疱瘡くさけゆじを てらる お薬を治す
 一 松茸の石つきをツ粉より振出—月ゆじ
 其まゝ出らるるなり

○ 疱瘡目へへると治す

一 鮫と倒よつり尾と切て血とろり。焼ふ
 其血と付て目よさすべし

○ 疱瘡の酒りと瘡 いやす 名譽の法なり

一 鶏卵の白と多れね てね して付し。何程 あか 元ぬく
 とも是と入れバトより瘡肉上 い 瘡

○ 疱瘡のしつうぬ法 秘傳

一 起脹 やまあけ—まひて後。家鴨卵 あひろのたまご 此白をろり
 顔 うや よ紗ろずぬり蜜べし。乾 つか 次 き 中 ちゆう よ介ろ
 くしこれく瘡 あせ つろず

○ 疱瘡の痕と失人菜

一 白粉 おしろい 十五 蛇骨 あやしの 十五 蛇粉 けいじん 十五 葛粉 くづのこ 十五
 右細末—大根汁 えんのじゆ をふわりて解。夏毛
 乃等よて産 くがき およ付べし妙なり

へ部の部

○蛇咬螫れらるゝと治す まじしも月

一 蠅頭スガキとすりて粘ねりみ押おしませ付つ紙かみよてくさ

すべし 一方ニ蠅ガヲウブレカサシ螫かタルニハリニ付ロラアケテ置ベシ 毒ドク氣キ出テ怒イラチ愈

○同法

一 うつぎのニッ葉ハとすり塩しほと海うみせてとこ
けあると出でし付つべし

○又方

一 鷓鴣アト 石い焼い 硫い黄きがし加か糲こよてけり付つべし

同

此こニ方かた蝮蛇ハハ大おほき咬かれらるゝ

一 蛭ヒル刺さ糞くそ塩しほが入い研すて傳つべし 非た効くわあり

又方またかた化ち榆ゆと粉こなよしづづ一日いちにちニ夜よ服くわし
咬かれらるらる処ところよもけ粉こな茶ちやと付つて愈なるなり

○同

一 楊やう葉のくとをこて付つべし 又方またかた回た螺ら 薑か

等ら分ぶんよすり研すよて解とけ付つべし 又方またかた掃か蕪ら

の汁じゆ也 又また薑か芋いも 牛うし膝ひざすり合あ付つべし

又方またかた蕨わづらとすりて付つべし

○同其外そのほか毒どく虫むし螫からるゝと治なる呪まじ

一 小刀にえよて其贅をとりよ(や)の字を書け

○ 瘰癧の菜

一 泥鰌どろやう 生漆きさうり

右二味押ませ 痛み付べ

○ 同方

一 松菜まつな 女松メマツより五月五月に付べ 杖つぎに若葉ワカバ

矢筈やのぼこ 各くろやきよして付べ

○ 同

一 地竜とろす 味噌みそ 各くろやき焼付べ

○ 同 妙方

一 乾白梅ひめがを核こもよくろやきねよくろやき。糊ろうりと等分

よ揉まて指ゆびのあきになく擦すりぬべ。痛いた止やり

妙なり。たゞ一日を経て腐くさるよても愈い

○ 同

一 罌けい粟い殼くをよくろやきねよくろやきして梅うめ乃は肉にくよくろやきて煉ね付けべ

○ 同

一 枳あ橘とをくろやき粉いかくろやき砕す糊のりよくろやきて付けべ

○ 同

一揚梅皮 蛇骨 苦分梅子此肉よて煉付べ

○同

一百草霜 味餅よて練合付べ 痛死よ止

○同

一芍薬根 淡黄根二重一寸四方み截少焼
細末し 鉄粉よてとさ付べし

○同

一李れ熟せうると黒焼は。朱少入細末し。
胡麻の油よて解付べし。痛立処よ止

○同

一松の苔 黒焼 蚯蚓の乾うると搗ませ付べし

○この部

○雀目此菜 小兒痲眼よ用てよし

一車前子此黒焼と粉よして鰻れつむやきよ

うりかけ用也

○飛火瘡菜

一芍薬 芍薬 大黃 甘草 少し

一芍薬菜の汁よて付べし

○發刺 拔茶

一 括蕪仁粉 蟻蛇乃腸おしほを押し合あはせて付上

み乾鮭乃皮かわとみここよするなり

○同

一 樞くわの實みをくろやま焼やきよして沖およて付つべへ刺そ忽は拵ぢ

○同 笠屋方

一 かい草 乾くわんして焼酒やうよてよきれ茶

葛くわの粉こな 香か木き分ぶん粉こなよする

右之味肉茶なり。付茶つちよハハ肉にくと何なになり

こも一味付へ

○同

一 半ご藤とうの根ねを嚙くは爛たんして付つべ

○月

一 櫻おうの實みと六月ご土用とよこり陰干かげよ

て密ひそ糊かみ押おませ付つべへぬけるなり

○毒矢どく中ちゆうアあうる時とき治ち法ぽう

一本いっ綿めんを其その疵きず口くちよあつつべへ毒どく氣け滯せるなり

○吐逆とと止とる茶

一 破梁

木と葉と根と、およして

白湯よて用也

○吐血と治する法

一 白芨一味粉よ一飯の湯よて服す極て
妙なり。或ハ童便よて服するもよ一
肺熱損

者ニ用テ
心妙ナリ

○同神授方

一 昔一人吐血氣促驚躁目直視するよ
此方と薬よ見うり用く即愈

益智 五

辰砂 四分

麝香 五分

細末して服す

○内損吐血下血と止る方

一 内損よて吐血下血。又大酒の後口鼻
耳前後の穴より血濺ごとく出るよ 側指

葉 十片 蒸

荊芥 十片 焼

人参 十片

右細末し服する夜よ 芫羅麪三片と右此
粉菜三五と拌合せ水よて粘し啜服す

○吐血と治す

一唐氏大黃 細末一 生地黃の自然汁一盃
と温り大黃一七? 空服よ用也。一日二度
? 用て血即止

○毒消

一藍の奕 二五 山梔子 皮と去き支

右細末一 湯よて用也

○毒消 長登

一着的石 破よ一夜浸
かいたんの土 寒の水よ
浸しきむ

抑粉 五分 金薄 七枚

右細末して ● 是不どよ丸一用也

一食傷急よ強く死入る時ハ思焼よしく口を
割て入秘率なり

○毒消

一腸金錠 痢病 淋病 宿食 酒毒と消

眼子菜 十五 二月四日ニ丸一夜氣よわて陰示る
粉よ一蔓しと葉先切てすて

山梔子 生粉よ一三五

右二味飯丸よして吞よ金箔とす

○解毒 諸毒よふれ 及び依の毒虫よ蝥れ
すちを治す

一 眼子菜 十五
 極上硫黄 鷹の目とりふくはし
 右二味粉よー糊よて梧桐子れ大さよ丸
 白湯よて用也

○ 解毒 秘方

一 紅梅花 麦そ
 葛苴 罐庵とよと用也

藍草 土用此 各等分

右三粒ともよ別こよ炭焼よーして調合
 毒よ中りたる附二三分づ用也すべて一切
 此毒と消し諸此食傷よ白湯よて用也

れハ或ハ吐或ハ瀉して愈

○ 諸毒此毒よ中りると治す

一 白扁豆

冷あよて用て炒なり
 蠶さー

○ 毒虫此毒よ中りると治す
 蒸し用ても香

一 香白芷 味きーとる 蒸し用ても香
 國老飲

○ 毒菜よ中りると治す

一 毒と食しとる者ハ胸腹こえり痛蟲咬
 ごとく血と吐ばる此肝のどく也 唾とみれ中

へ吐て見へ—つてき唾吐づむハ毒なり。浮ハ毒よ
 あ〜次。又的禁石と合ひよ志ぶ〜次。味耳
 きハ毒也。是よハ白礬ちくむん 式分 車州かんとく 式分
 と細末〜ありて用べ〜。黒き涎と吐く活
 ○神仙解毒百病丸あんなせんげどくまんびやうあん 諸毒をけし。又依毒中り
 日數經うるよよ〜
 一續阿子ぞくすい 式分 大戟だいげき 三分 又倍またい 三分
 山慈姑さんじこ 式分 麝香じやくかう 式分
 右粉よ〜糊よて●是やどよ丸〜十粒〜
 白湯よて用ゆ

○一切毒蟲ハ救虫うる薬
 一毒代黒雄黄どくだいこくゆうわう 粉こな 新汲水よて服すべ〜
 ○毒よ中どくよちゆう うるを治す
 一食物乃毒よ中〜する時ハ雞屎灰けいしがいよ焼
 てありよて少許服すべ〜○臭の毒よ中〜ハ
 陳皮ちんひと濃煎のうせんと飲のくはし○砒霜石の毒ひそうせき
 巴豆ばとうハ毒よ中〜ハ藍根あいのねと砂糖さとうと合せ水
 よて服すべ〜。又薄荷はうたの汁じゆを加へてむよ〜○
 附子ぶしの毒よあり〜ハ黒豆汁くろまめ 防風湯ぼうふうとう 田螺搗でんら

碎き水よて飲べし俱に効あり○一切薬毒
 よのくうハ耳草黒豆洗竹葉等水一
 盞入煎服す○服薬過度煩悶死せんと
 するを藍を搗て汁と丸散盃服すへし。藍
 をき時ハ毒深の絹布を水に浸し汁と
 絞りあして飲も亦佳なり按毒ヲ解スルノ薬ハ冷
 服スルニ宜シ。若熱シテ服スレハ毒愈盛ニナルヘシ慎之ヲと々

字書品目 定榮堂

大坂心齋橋南 吉文字屋市兵衛

早引正字通

大本増補 真字引

全

廣益三重韻

小本全二冊 并薄用指 合本

真字畫引ニテ字ヲ見ルニ甚早シ是ニヨツテ早引ト題ス早キ字ノ引ヤウ委ク右ノ本ヲ見テ知レ奥ニイロハ引四射千字文其外文字ノ要用ヲ集メノス

唐音附改正増補此廣益大ニ他ノ三重韻ニニサレリ
 增益伊呂波韻 文字訂正熟字ハ全

唐詩選

七才詩集

字引

上ノ三書之熟字ヲ副シ文字ヲ正シ誤ヲ改ム

校定卷懷韻鏡

折本懷中本

急用間合即座引

節用捷徑 懷中本

字ヲ反切スルノ法又字母字ヲ見合テ帰納ノ字ヲ知ニタトニ又字ハ三轉ニテ母字ハ十五轉ニテリ兩方ヲ開キ置ニ總タル本ニテハアナラヲ開ケタリコチヲ見タリ甚不便利ナリ此書ハ折本ニシテ兩方一モ向ス開キ置ニ差ツカユルヲナク字ヲ反スニ至テ見ヨシ右訂正究テ善 清家ノ御跋アリ磨光韻鏡ノ作者文雄師長閱シテ賛セラレシ自鏡是ナリ喻韻鏡ノ書ヲ貯持トモ尚此本ヲ調ヘ字ヲ反切スルニ用ヒハ甚速ニシテ勞ナカラン

四季分平仄附袖中節用集 懷中本
 文字ヲ正シ假名遣ヲ改和哥連併ニ用ル字ハ春夏秋冬ノ季附ラニスベテ一字毎ニ平仄ツケカ事ニ通達ノ節用ナリ
 字ヲ御引被成候ニ至極早ク御座候其訣ハ是迄有來候節用ニ弘法孝行光明カニ三入候故何ニ有候ヤ分カタク尋候ニ際入申候此本ニニ加様ノ字ニキラハヒカラス即坐ニシ申候其外字早引ケ候様委クテ口ニ記置候御覽ニ御求可被候

